

# 寄贈図書の紹介

## 編集委員会

関口高史著『板垣征四郎の満洲事変  
—本当に独断だったのか?』

著者の関口高史氏は、陸自88期、第1空挺団、陸上幕僚監部調査部、研究本部総合研究部、防衛大学校防衛学教育学群戦略教育室等で勤務した予備1等陸佐です。『牟田口廉也とインパール作戦』(光文社新書)、

『誰が一木支隊を全滅させたのか』(光文社NF文庫)などの著作の他、

NHK『新・映像の世紀』映画『雪風』などの軍事考証も行っています。

本書は、陸軍中央部の視点ではなく、現地部隊の一参謀・板垣征四郎の視点から満洲事変に真摯に向き合うものです。

板垣は「平和に対する罪」に問われた東京裁判において、満洲事変は国家の問題であり、侵略即犯罪でないことを明らかにするのは個人の問題ではない、と語つて検察官からの追及に真っ向から戦いました。

板垣の主な弁明は、「満洲事変は『自衛戦争』(パール判事の「自衛戦争論」と一致)であり関東軍参謀として上官の命令に従つて国家の利益

を守るためだつた」などでした。

なお事変当時の関東軍司令官本庄

繁は「満洲事変ハ排日ノ極ミ、鉄道爆破ニ端ヲ発シ、関東軍トシテ自衛上止ムヲ得ザルニ出デタルモノニシテ、何等政府及ビ最高司令部ノ指示ヲウケタルモノニアラズ、全ク当時ノ関東軍司令官タル予一個ノ責任ナリトスル」との遺書を残し1945年11月、逮捕前に自決しています。

## 目次

### 第一部 板垣のこと

第一章 出生と幼少時代

第二章 情の人、板垣

第三章 满蒙問題の背景

第四章 日本を取り巻く情勢

第五章 解決方法の模索

第六章 条件の作成

第七章 決行

### 第四部 板垣の評価

第八章 当時の評価

第九章 東京裁判における評価

終章 武力を用いることのない平和

